
本当はもっと面白く恐ろしいニッポン昔話

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本当はもつと面白く恐ろしいニッポン昔話

【Nコード】

N3306H

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

皆さんに馴染みの深い、様々な日本の昔話は、本当はもつと面白く、或いは恐ろしいのです。お分かりになると思いますが、全て作者が勝手な想像で捻じ曲げた嘘八百の内容ですので誤解の無いようによりしくお願いします。

第一話 桃太郎

1

昔むかし、吉備の国、現在の岡山県辺りの山のふもとの村に、お爺さんとお婆さんが住んでいました。お爺さんは、昨日は畑を耕し、今日は山へ芝刈りと言った典型的農民の毎日を真面目にこなしていましたが、生来種無し野郎だったので、嫁を貰っても遂に子宝にめぐまれませんでした。その癖、男尊女卑丸出しでくどくどとお婆さんを責めたので、大層嫌われ、実際には同居離婚状態になっていたのです。

そんなある日、婆さんが自分の服は丁寧に、爺さんの服は足で適当に川で洗濯をしていると、上流からやたらでかい桃が流れてきました。

「おう、これはもうけもの。家に持って帰って独り占めして食べることにするか」

お婆さんは川にドカドカと入り込み、スイカ並みの大きさの突然変異確定の巨大な桃をタライに入れて持って帰り、腐る前に、お爺さんの帰る前に全部食べてしまおうと、包丁で一刀両断にざくつと切ると、中から頬から血を流した赤ん坊が出てきたではないですか。お婆さんが腰を抜かしていると、お爺さんも帰ってきて、なんじやこの子どもは、婆さん、遂にトチ狂って人さらいに堕ちたか、などと云っていると、その赤ん坊が

「ありえん。頬に傷がついた。ババア、この落とし前は必ずつけるからなボケが」

と、まだ動かない手足をバタバタさせながらしゃべったので、二人はますます腰を抜かしてしまいました。が、二人ともいい年なの

で、赤ん坊の悪態は特に気にせず、これは神様が子宝の無いわしらに恵んでくださったのじゃ、などと納得して、桃から生まれたので桃太郎と名づけよう、などと話を進めています。

「おい、そんなダサイ名前は嫌だ。悪法太宏影にしろ」

と抵抗しましたが、残念な事に0歳では実力行使も出来ません、赤ん坊は桃太郎と名づけられ、二人に育てられる事になったのでした。

2

桃太郎はすくすくと元気に育ちました。今日は隣の家のサツちゃんを泣かし、明日は村中の悪ガキを集めて戦争ごっこをし、人の家の柿を盗んで食べ、道端に落とし穴を掘り、お爺さんに叱られると逆に投げ飛ばすと言う、救いがたい恩知らずのろくでなしに育ちました。頬にはヤクザよろしく斜めに傷跡があり、衣装は常に歌舞伎もののように派手で、髪の毛は長髪のざんばら、近隣の人々が恐れるに十分な風貌をしていました。そして十五歳、昔の侍なら元服できる年になったとある日も、隣村の子から取り上げたお金で、茶屋で饅頭など平らげていると、旅の商人がこんな話をしているのが耳に入りました。

「都の天子様が、鬼が島の鬼どもに懸賞金をかけたそうな」

「ああ、鬼が島の鬼を退治したらたと褒美をくれるというあれか」
「でも、鬼にはさすがに勝てないよなあ」

桃太郎は耳を澄ませて会話を聞いていました。

「ほほう……鬼退治をすれば褒美が山ほどか。今のままじゃ一生ゴミのような農民のままだよな。よし、いっちょやってみるか」

そして、まず村の少年達に鬼退治をよびかけてみました。が、怖くて誰一人一緒に行くとは言いません。頭に來た桃太郎は、一人づつ蹴り倒した後、家に帰り、武装を固め、出発の準備をはじめまし

た。こわごわその様子を見ていたお婆さんは、何処へ行くんだい、あんまり無茶すると奉行さんに捕まるよ、などと言うと

「いや、婆さんよ、俺は鬼退治をしにいくのだ」

と、けなげやら恐ろしい事を言うので、内心鬼に殺されて二度と帰ってくるな、と思いつつ、餞別せんべつにきびだんごなど作って渡すのでした。

3

腰に二本の脇差を差し、さらに長槍を手に持ち、どこからか手に入れた駄馬にまたがる姿だけは、颯爽さつそうとした若侍風の桃太郎は、内海のとある場所にあると言う鬼が島に向かって出発しました。見送るお爺さんとお婆さんは色々な意味で泣いていたのでした。

村を抜けていく途中、一匹の土佐犬に遭遇しました。

「コイツは勇敢そうだ。おい、きびだんごをやるからついて来い」

犬は本来利口な生き物ですが、所詮畜生なのでだんご一個如きであつさり忠誠を誓うのでした。

さらに行くと、森になりました。すると、そこではきじに会いました。

「強そうなお侍さん、どこへ行くのですか」

「ふふ。悪い鬼を退治しに行くのだ。お前もついて来い。鳥は偵察に使えるな」

このきじはだんごに騙されたというよりは、武士と言う権威に負けた、と言う感じでした。

犬ときじを連れてさらに進むと、今度は猿が一匹目の前にあらわれました。猿はすばしこく左右に体を振り、隙をみて桃太郎の腰のきびだんごを奪おうとしました。が、動体視力のよい桃太郎は瞬時に見切り、ひじで猿の頭を打ちました。猿は道に倒れました。

「甘いわ外道が。死ねえ！」

桃太郎が止めをさそうとすると、犬ときじが殺すより部下にして

こき使ったほうがいい、と早速桃太郎の悪に感化された台詞を吐くと、それもそうだな、と納得し、猿を部下にして、いよいよ一行は海原に出て鬼が島に向かうのでした。

4

「どうだった？」

小船のへさきから様子を見ていた桃太郎は、偵察から帰ってきたきじに聞きました。

「どれらい数ですよ。百人ぐらい余裕でいます。どいつも金棒やらなにやら武器持っていましたし、体もエライでかいですよ。命が惜しけりや帰ったほうがいいです」

「ぬうー！しかし俺は引かぬ！媚びぬ！顧みぬ！桃太郎に敗北の文字は無いのだ！」

遠く視界の彼方に鬼が島がかすんで見えます。桃太郎は一計を案じ、きじに耳打ちしました。きじは口元を歪めにやりと笑い、さすがご主人様は悪ですよのう、と笑い、再び飛び立っていきました。

「桃太郎様、何を企んでいるんですかい？」

と犬と猿が聞くと、桃太郎は不敵に笑っていった。

「戦わずして勝つ、それが俺のやり方だ。お前ら、首桶を用意しておけ」

とだけ言うと、腰の徳利に入った酒をガブガブあおり、やがて寝てしまいました。

日も暮れて、波が心なし高くなった頃、きじが再び帰ってきました。桃太郎はむっくりと起き上がり、きじに首尾を聞きました。

「大成功です。あいつら、片端からくたばっちまりました」

「よし、行くぞ。犬猿、こげ。後は首をかきあつめるだけだ。わはは！」

「一体何をなさったんです？」

犬が小首を傾げると、きじが懷から小瓶を取り出す。

「こいつを鬼どもの料理に混ぜてやったのよ。どいつこいつもあつという間に帰らぬ人……。帰らぬ鬼になったわ。アーヒヤハハハ」

こいつ最初こんなキャラだったつけ、と桃太郎ですら思ったが、とりあえず万事上手くいったので、洋々と霧の立ち込める鬼が島に上陸したのでした。

5

本当に鬼は一人残らず倒れ付して死んでいたので、ともかく大將つばい奴と、その他数人の首を獲って、馬の輿に結びつけ、桃太郎らは一直線に都に凱旋した。その道すがら考えた。

「手柄は独り占めするに限るな」

と言う事で、まず最大の功労者のきじを寝てる隙に首をひねり上げ、きじ鍋にして平らげ、次に犬を消すために、歩いている時に骨を田んぼのほうに投げたら、犬が取りに行ったのでそのまま放置し、猿は歩いている時に後ろから当身を当ててそこへ放置し、無事一人で京の都に辿り着き、天子様に戦果を報告し、見事に山のような褒美をもらい、一生幸せに、ますますくでなしのならず者として暮らしたのでした。（終わり）

第二話 鶴の恩返し

1

寒い寒い凍えるような冬の吹雪の中、お爺さんは暖炉にくべる薪を集めるため、冬山の中を歩いていました。すると、どこからかキーンというような悲しい鳴き声が聞こえてきます。そこで、声のするほうに行ってみましたが、特に誰もいません。吹雪の中の幻聴か？最近ボケ気味だからのう、とお爺さんが自嘲していると、またいつそう悲しげな声が聞こえてきました。今度こそ声の方角を把握したお爺さんは、そこで罨にかかっている一匹の鶴を見つけました。足に紐がかかっており、誰か猟師辺りの生業なのはすぐにわかりました。

「鶴って食べたらいのかな？それより、料理屋に売るほうがいいか。鶴より鴨のほうが旨そうだし」

猟師のハゲはそこらにいないようだし、わしが連れて行ってもばれまい。お爺さんはそう判断し、さっそく鶴の罨を外しにかかりました。しかし、紐が解けたとたん、鶴は雪降る大空へと高く舞い上がりました。

「あつ、しまった、すばしい奴じゃ」

そんな爺さんの思惑を知ってか知らずか、真っ白な鶴は暗い空を数度回転した後、いずこへとも無く飛び去っていったのでした。

2

「今日は残念な事をした」

と、ボロい藁葺き小屋に帰ってきたお爺さんは、鶴を持ち去ろうとして失敗したとお婆さんに報告し、白い目で見られながら粥かゆ雑炊をすすっていました。ますます吹雪は強まり、数日は止みそうにも

ありません。しんと更けていく夜のさなか、そろそろ眠ろうかと二人が話しているところに、扉を叩く音が聞こえてきました。お爺さんが開けてみると、そこには頭にも肩にも雪を積もらせた、真っ白な着物を来た一人の若い女性が立っています。

「道に迷ってしまいました。どうか一晩だけ止めてくださいませんか」

消え入るような声で話す深夜の訪問客は、服のみでなく顔までも真っ白で、雪細工のような肌と、大きな瞳と、整った顔立ちで、お爺さんは忘れ去っていた野蛮な情熱を思わず思い出すほどでした。

「ああ、いいともいいとも、さあ、おあがり」

お婆さんへは一言も相談せず、即決で見知らぬ人間を家に上げたお爺さんは、文句を言いたそうなお婆さんを睨みつけ、いそいそと布切れで髪などを拭いてやるのでした。

「どこへ行く途中だったのだい」

お婆さんが聞いても弱々しく微笑むだけで答えません。ますます怪しからん、と思うお婆さんを尻目に、お爺さんはかいがいしく残り物の雑炊をもう一度温めて、その女性に用意してやったりするのでした。やがて、就寝の時間になりました。かまどの火を消し、闇闇が訪れ、お婆さんと奥の間に寝かせた女性が寝息を立てはじめた頃、お爺さんはこそそと厠かわやに行く振りをして、足音を忍ばせて奥の間の障子を開けて中に入り込み、そうつと布団をめくろうとしました。すると、女性がぱつちりと目を開け、

「私にちよつとでも手を触れたらあなたを殺しますから」

と、暗殺マシンのように無表情で言いました。お爺さんは、顔を引きつらせ、真っ青になって震えながらすごすこと自分の布団へ戻っていききました。

あの日から三日三晩、猛吹雪は続き、女性は家を出発したくても

出来ない状況になってしまいました。そこで、ただ泊めてもらうのは申し訳ない、と女性は機織りを始めました。一晚中、ギーツ、ボタン、と機織り機の音は鳴り、お婆さんはおかげで不眠症、お爺さんは淫らな欲望に苛まれる、と言う日々が続きました。四日目の朝、奥の間から疲れた様子の女性が出てきました。その手には、大変美しい風景や模様が描かれた上質な絹の反物がありました。二人は思わず目を合わせました。

「これは素晴らしい。どこにこんな生糸があつたんじゃ」

「お爺さん、これを市場で売れば大変な高額で売れますよ」

女性は微笑みながら、どうぞこれ売ってきてください、私からの泊めてくださったほんのお礼です、と言いました。

お爺さんが市場に売りに行くと、信じられないような高額で売れました。半年は働かなくてすむほどです。お爺さんは大喜びして家に帰ってきました。

「あの子はどうしとる」

聞くまでも無く、奥の間から、また ギーツ、ボタン、ギーツ、ゴットンという音が聞こえてきます。お婆さんがそっと耳打ちしてきます。

「あのお嬢さん、身よりもなさそうだし、ここにずっといてもらえばいいんじゃないよ。そしたら私ら働かなくても楽な暮らしできるわい」

「そうじゃな、そうすればわしにもいつかチャンスが……いや、なんでもない、うん、そうしよう」

そこでお爺さんは障子を開けて、奥の間に入ろうとすると、

「開けないでください。そこを開けてはいけません！」

と、大きな声が返ってきて、驚いていると、少し経って女性がすつと出てきました。顔が少し青ざめているように見えます。

「一つだけお願いがあるのです。私が反物を織っている時はどうか見ないでください」

お爺さんとお婆さんは、一瞬戸惑いましたが、ともかくそれを約束しました。そして、いつまでもここにいていいんじゃないよ、仲良く

暮らしていこう、とそれぞれの下心を隠して言うと、女性はとても嬉しそうに微笑みました。しかし、自分の名前ですとか、どこの国から来たか、などと言う身の上話には答えず、ひたすらに反物を織る毎日を送るのでした。

4

女性の織る反物は相変わらず高く売れ、家の生活にはドンドン余裕がでてき、お爺さんは酒を飲み博打を打ち、お婆さんは豪華に着飾って家事を放棄し、典型的な駄目人間に堕ちて行く二人なのですが、女性はそれも気にせず、家事もし、織物も続けるのでした。少しずつやせ衰えてきているのは傍目にもわかるので、二人は、毎日織らなくても、一ヶ月に反物一つぐらいでも十分なんだよ、と言うのですが、女性は全然人の言う事を聞かないので、やがて言うのをやめました。ある晩、おじいさんはたたかに酔って帰ってき、前後不覚の酩酊状態のまま、寝床に就きました。夜中に喉が渴いて目が覚め、土間へ行って水を飲んでいると、やはり今晚も奥の間からはろうそくの光と例の機織り機の音が聞こえます。酔いの覚めていないおじいさんの、いよいよ溜め込んでいた女性への悪しき邪な欲望が爆発しました。

「今宵こそあの子をわしのものにする」

鼻息荒く、忠告も忘れ、お爺さんは勢いよく障子を開けました。すると、そこには一羽の美しい鶴がいて、一生懸命反物を織っていました。くちばしで自分の羽を抜いては、生糸に織り込んでいました。

「しよ、正体は、つ、鶴じゃったのか……」

果然とお爺さんは言いました。鶴は、悲しそうにこちらを見ると、一旦人間の姿に戻りました。そして、

「お爺さん、あの時命を助けてくれてありがとう。本当に嬉しかったです。だから、私、恩返しに来ていたのです。でも、一度でもこの姿

を見られたら魔法が解けて終わりなんです。私は元の鶴に戻り、自然界に帰ります。短い間だったけれども、本当に幸せでした。では、さようなら」

鶴は涙を浮かべて別れを述べて、再び鶴の姿に戻り、扉から大空へと去っていきました。お爺さんは起きだしてきたお婆さんと二人、いつまでもいつまでも星の輝く夜空の向こうをながめていたのです。

あの日以降、老夫婦は毎日のように山へと足を運びました。目的は唯一つ、罨にかかった鶴を解き放つ事、それ以外にはありませんでした。しかし、遂に同じような鶴を発見する事は出来ず、もとの貧乏暮らしのまま、余生を終えました。お爺さんは、病床の中で、うーん、わしが助平でなければ、と何度も後悔していたのです。（終わり）

第三話 かぐや姫（竹取物語）

1

今は昔、遙か千数百年も前の頃、竹取の翁おきなと呼ばれるお爺さんがいました。山の竹林へ行き、比較的柔らかい竹を切り、それを切り取って筒や籠を作って売る仕事をしていました。ある日、いつものように山奥の竹林へ行くと、そこに何やら光が見えます。なんじやろう、と近寄ると、一本の竹が淡い光を湛えています。不思議に思った竹取の翁は、ともかく切ってみることにしました。すると、中にはなんと小さな女の子がいるではありませんか。三寸（10cm程度）ほどの体で、上品な着物をまとい、髪も黒く長く、顔立ちも大変美しく、翁は最初は人形かと思いました。しかし、

「おじいさん。どうか私を家に連れて行って育ててください」

と口を開いたので、翁は二度驚いて、ともかく家に連れて帰り、恐る恐るご飯や漬物などを与えたところ、すくすくと育ち、あれよあれよと言う間に、三ヶ月程度で成人ほどの体の大きさに育ったのでした。名前は、と聞くと「なよ竹のかぐや姫と申します」と答えましたが、フルで呼ぶと長いし言いにくいので、翁はかぐや姫と呼んでいました。どんどん成長するので、着物を買っても買っても追いつかず、翁が細々貯めていた僅かな貯蓄はあつという間に消え去りました。安い木綿の着物を買ってくると、

「私は月から来た姫なのです。そのような下賤のものが着る服は着とうございませぬ」

と悲しそうにかぶりを振ります。この小娘、と翁は内心怒りを覚えましたが、根が善人なので、言われるがままに、貴族が着るような京染めの質の高い着物を着せてやったのでした。

「月から来たとはどういうことじゃ？」

と聞くと、

「翁に説明してもわからないでしょうし、また、する必要性も感じません」

とだけ言うと、プイと横を向く。翁は、このメンヘラめが、何が月から来ただ、こいつが成長したら女郎屋（売春宿）にぶち込んで元をとってやる、と息巻いておりました。

2

しかし、かぐや姫は大層美しかったですし、翁が私財をはたいてお洒落にしてやっていたので、近隣に評判になり、毎日のように遠路はるばる様々な種類の男達がかぐや姫を見物に来ました。その多くは、かぐや姫にお近づきを願いましたが、その一人ひとりの額をじつと見つめ、やがてため息をつき、交際を断るのでした。噂が噂を呼び、ある時は摂関家の子息である、藤原固真理と言う貴族の男がやって参りました。貴族特有の傲慢さで、断つてもろくに耳を貸しません。そこで、かぐや姫は一つのお願いをしました。

「では、『佛の御石の鉢』を探してきてください。それを持ってくればあなたと結婚しましょう」

固真理はそんな鉢を聞いた事もなかったので、しぶしぶその場は帰り、探してみました。全くわからないので諦めたのでした。

ある時は、豪放で知られる名のある武士がやってきました。慇懃無礼、態度も申し分なく武士そのものでした。これもまた聞く耳を持っていない強引な男であつたので、またかぐや姫はお願いをしました。

「ならば、『龍の頸の玉』を持ってきてください。それを下さるならあなたの妻となりましょう」

「なに、龍だと？ 龍は実在する生き物ではないはずだが」

などと言いながら、武士は去っていきましたが、やはり二度とかぐや姫の前には現れません。横で聞いていた翁は、この小娘、わざとありもしないそれらしいお宝の名前を言っておるな、と思い

ました。なんでもいいからとつと名家の子息辺りと結婚してくれば、わしも楽隠居できるのにのう、と思いながら、今日も明日も竹林へと向かうのでした。

3

やがて、かぐや姫は家にじっとしておらず、外を出歩くようになりました。歩いているとすぐにナンパされるので、財布などは一切必要ありません。かぐや姫は、瞬く間にアッシー君を二十人ほど集め、近隣から、遠出まで様々に出歩くようになりました。そして、どうやって手に入れるのか、色々な贈り物やお金などを翁に手渡すので、翁的には無問題と言う事で、この不良娘が何をしていようが我関せず、と言う態度を取っていたのでした。

しかし、かぐや姫は決して遊び回っているわけではありませんでした。ある目的を持って、各地の男性を物色しているのです。そして遂に、捜し求めていた男性を発見しました。その男は宮廷の警護についている衛士で、真面目そうな男でした。が、絶世の美女のかぐや姫にかかつてはイチコロで、あっさり交際を承諾し、翁の家へと連れて行かれるのでした。

「お爺様、ただいま帰りました」

「おおかぐやよ、今日のお土産はなんだい」

もはやかぐや姫「お宝を持って帰ってくる人となっているので、翁は今宵は何か、と思って門を開けると、一人の男が伴っているのみで、興ざめになりました。

「その男は誰だい」

と、一応確認すると、かぐや姫は慇懃な態度になって、

「竹取の翁様、今日まで本当にお世話になりました。手の平程度の大きさであったこの私を、ここまで育てくださって、また、着物や化粧道具なども買っていただいて、このお礼はいずれ必ず致しま

す。お別れの時がやってきたのです」

竹取の翁と、もと衛士の青年が何事か、と驚いていると、空が突如暗くなり、一気に夜がやってきました。

「なんだ!？」

と青年が驚いていると、青年の額の三日月模様のあざが光りだしたではありませんか。翁が驚いていると、かぐや姫の首元も輝き始めました。

「これから、月に帰ります。今お迎えの飛空挺が来ます」

「飛空挺って……あ、あれは!？」

満月の空から、眩く輝く大きな船が静かにやってきました。腰の抜けた翁を尻目に、ゆっくりと地面に着陸した船から伸びてきたタラップにかぐや姫と青年が足を乗せます。と言いますか、青年は殆ど引きずられるように乗せられた、と言うほうが正しいでしょう。

「では翁様ごきげんよう、さようなら」

かぐや姫の別れの言葉と共に、その大きな船は再び天空に舞い上がり、一直線に満月に向かって飛び、やがて見えなくなりました。

4

船内には、銀色や白色の簡素な服を纏った人々が乗っていました。かぐや姫は、直ちに奥のほうへ消え去り、もと衛士の青年、徳丸は取り残されました。そこへ、上品そうな白髪の老人が近づき、待っておりましてぞ、月の七勇士の一人、舞月殿、と声をかけました。

「いえ、僕は徳丸と言う」

「いや、あなたは舞月殿です。他に、翔月殿、蹴月殿、咬月殿、激月殿、守月殿、勝月殿、合わせて月の七勇士なのです。全員が揃って、初めて月下に潜り邪悪の瘴気を溜めつくしている魔怨獣弩羅悟を倒す事が出来ますのじゃ。あなたが最後のお一人だったのです」

と言う中二病設定のラノベのような話に徳丸が声も出せずにいると、

「お願いします、舞月殿、月の未来と平和のために」

気づけばかぐや姫が着替えてそばにやってきています。徳丸はその露出の多い服装に唾を飲みました。一面煌くゴールドの生地で、胸は大きく開いて谷間が見え、臍も見えているし、下はなんとレオタード状態で、僅かに腰にフリルのようなものが申し訳程度についているだけ。頭にはティアラのようなものが載っています。首のあざはまだ光っています。

「私の本当の名前はムーン・トゥエル・カグヤ。月の平和のために戦う聖戦士なのです。舞月、共に戦ってくださいね」

こんな状況で嫌も何もあったものではありません。こうして、徳丸こと舞月は、月の未来を賭けて、魔怨獣弩羅悟とやらと戦うハメになったのでした。（終わり）

第四話 猿蟹合戦

1

昔むかしのこと、とあるのどかな村を、嫌われ者の根性の悪い猿野郎と、人が良く、誰とでも仲良くしてあげる力二さんが一緒に歩いていました。猿は意地汚く何か落ちていないか、と道を探していました。すると、柿の種が落ちていたのを見つけました。浅ましくそれを拾い上げてキッツと嬉しそうにしました。さらに少し歩くと、今度は力二さんが草むらに落ちていた握り飯を見つけました。

「お、おい、力二、それをくれよ、この、柿の種と交換しようぜ」
「うーん、私もこの握り飯を食いたいなあ」

子どもを身ごもっている力二さんは栄養が必要なのでした。しかし、猿は問答無用に握り飯を取り上げ、瞬く間に食べてしまいました。そして、力二さんに柿の種を放り、お腹がふくれたのでその場に横になって、居眠りをはじめてしまいました。しょうがないので、力二さんは家に帰って、庭に柿の種を植えて、水をやりました。

すると、あつという間に芽を出し、すくすくと成長し、立派な大木に育ち、柿の実を結びました。

「うわー、魔法の木だあ。でも、私はこの木に登れないよ。どうしよう」

と、力二さんが思案していると、昼寝を終えたサルがよだれを垂らしてやってきました。

「すげえ、山ほど柿の実がなってるじゃん。ウキツ！」

と鳴くと、スルスルっと木の上に登り、熟した柿を片端から食べはじめました。

「サルさん、私にも一個取ってちょうだい」

と、下から力二さんが言っても無視です。お腹の減った力二さんが何度かお願いすると、

「ああ、うるせえな、じゃあこれでも食ってろ」

と言い、猿はまだ青い熟していない柿を力二さんに何個も投げつけました。

「ううっ」

身重であつた力二さんのお腹に固い熟す前の柿が命中してしまい、力二さんは昏倒して倒れました。

「あつ、なんかやべえ。俺、知らねつと」

猿はさつさと逃げてしまい、意識の混濁した力二さんは、這うように自分の家に戻ろうとしました。

「力二さん、どうしたんだ！」

空から友達のハチさんが飛んできて、力二さんに肩を貸しました。「サルさんにお腹に柿をぶつけられて、もう生まれそうなの」

「なんだと！よし、まず家に入ろう。俺は産婆のフンババを呼んでくるからな」

そして力二さんを家の布団に寝かせ、ハチさんは牛の糞のフンババばあさんを連れて戻ってきました。

「いかん。胎盤が損傷しているわい。力二さんの命が危ない、ハチさんや、お医者を呼んできておくれ」

「あゝっ、生まれる」

力二さんは歯を食いしばって五人の子どもを生みました。フンババばあさんが一人ずつ湯桶で荒い、綺麗な布で拭いてあげましたが、残念な事に、一人を除き全員死んでいました。フンババばあさんが泣いているところに、医者の臼どんと友達の栗さんもやってきました。が、虫の息だった力二さんは、やがて息をひきとっていました。

力二さんの葬儀が終わった後、力二さんの家で、臼どん、栗さん、ハチさん、フンババばあさんは一人残された力二さんの息子、力二

くんを囲い、あの猿野郎だけは許せない、復讐をせねばならない、と言う事で一致しました。まだ生まれたばかりなのに、事情を理解したカニくんは怒りのオーラを燃やしています。五人は綿密に打ち合わせをし、決行を明日に決め、解散しました。

翌日、猿は悪びれもせず、カニさんの家の横の柿の木によじ登り、たらふく柿を食べ、そして家に戻ってきました、すでに復讐の宴の準備は整っているのです。

「あー、寒い寒い」

と、猿がいろりに木をくべ、暖まっていると、いろりの灰の中から、栗さんが飛び出してきました。

「食らえ！南斗栗身砲弾！」

猿は頬に栗さん渾身の体当たりを食らい、大きくよろめき、熱さに飛び回りました。慌てて、玄関の水を溜めている壺のふたを開けると、その中にはハチさんが待っていました。

「猛毒で地獄へ行けい！スカーレットニードル！アンタレスまで我慢できるんかあ！？」

と、何箇所も毒針を刺され、猿は痛みにもがきながら家から逃げようとしてました。が、玄関口にはフンババが君臨していたので、猿は惨めにすっころんでしまいました。そこへ、屋根の上から臼どんが飛び降りてきました。

「キング・ザ・１００トンプレス！カニさんの恨みを思い知れい！」

猿は息もつけず必死に臼どんを払いのけ、よろめく足で逃げようとしてました。が、そこへ、カニくんが待ち受けていました。

「おめえはオラの大切なお母さんを奪ってしまった……絶対に許さねえ」

家の中から様子を見ていた栗さん、ハチさん、フンババばあさんは目を見開きました。カニくんの体が黄金に輝きだしたのです！

「あああー！あれはまさか」

「で、伝説の超力ニヤ人！？」

「千年に一度生まれるという格闘の超天才のことかああーっ！」
猿は逃げる事も出来ず立ち尽くしています。カニくんが、雄叫びと共に地面を蹴りました。小さな体が、信じられないほどの速さで蹴り突きを打ち込みます。

「これで終わりだーっ！っ！」

猿を空に蹴り上げたカニくんは、全身を震わせて黄金の波動を猿へ向けて放ちました。

「うぎゃああーっ！」

空中で大爆発が起こりました。ただ見守るしか出来なかった臼どの足元に、猿のちぎれた手首が落ちてきました。

「これで全てが終わりましたよ……ありがとうございます」

カニくんの輝きが消えた。敵討ちを果たした。空は限りなく澄んでいた。（終わり）

第五話 耳なし芳一

1

昔むかし、周防の国（山口県）にある阿弥陀寺に、芳一という名前の目の見えない琵琶法師が住んでいました。芳一は平家物語の弾き語りが得意で、それを聞いた者は涙せずにいられない、と言うほどの名手でした。

ある夜、和尚らが所要で留守なおり、芳一が琵琶の手入れをしていると、コンコンと締め切りの土間の扉を叩く音がしました。芳一が開けてみると、立派な姿の侍がそこに立っており、是非我が殿のために琵琶を弾いていただきたい、と所望されました。芳一が許諾しつついていくと、そこは立派な武家屋敷のようでした。大広間に案内されると、盲目の芳一には見えませんが、貴人が集まっている様子が感じられました。

早速請われるままに、平家物語の壇ノ浦の戦いのくだりの演奏をはじめました。

去程に阿波の民部重能は、嫡子伝内衛門教能を生け捕りにせられてかなはじとやおもいけん。甲をぬぎ弓の弦をはづいて……

集まった皆が熱心に耳を傾けているのが伝わり、芳一も熱を持って演奏を続けました。皆口々に小声で、評判どおりだ、素晴らしい琵琶の音色だ、と感激の言葉を発しています。いよいよ語りが佳境に入ると、すすり泣く者、打ち震える者、尋常ならざる反響に、芳一は内心驚きました。演奏が終わると、静かな拍手に包まれ、案内してきた武士に、お礼を言われると共に、七日七晩連続で演奏をしていただきたいと頼まれ、これほどまでに感動してもらえるなら、とその願いを受け、毎晩この屋敷に来て平家物語を演奏することに

なりました。

2

毎晩夜遅くに芳一が出かけるのを怪しんだ阿弥陀寺の和尚は、朝に芳一をつかまえ、毎夜どこに行っているんじゃないかと尋ねても要領の得ない返事しかしません。和尚は、芳一とて若者、もしや女郎街にでも行っておるのかも、と思い、寺の下男に見晴らせ、後を付けさせる事にしました。

夜も更ける頃、下男が庭の隅に潜んで蚊に悩まされていると、芳一が寺の門を出て行く姿を見つけました。足音を立てないようにこっそり後を付けていくと、芳一は山のふもとの墓苑へと歩いてゆく。そこは平家一門の墓地で、芳一は安徳天皇の墓の前に座り、琵琶をかき鳴らし平家物語の演奏をはじめました。周りには無数の鬼火がちらついています。下男は驚いて、大声を上げながらそこへ走り、無理やり芳一を立たせ、後ろも見ずに一目散に寺に逃げ帰りました。

22

事情を聞いた和尚は、このままでは芳一があのだに連れて行かれるかもしれない、と恐れ、除霊をすべきだと考えましたが、あいにく今日は遠出せねばならず、明日以降でないと時間が取れないので、そこで、あることを思いつき、芳一の着物を脱がせ、見習いの小坊主と共に、全身に般若心経を筆で書きました。つま先からおでこにまで、びっしりとありがたいお経が書かれました。

「芳一よ、これで怨霊にはそなたの姿は見えぬ。呼ばれても決して返事をするでないぞ」

と和尚は忠告し、従者らと共に出かけていきました。

3

その晩も、例の侍が芳一を迎えにやってきました。

「芳一どの、今晚も頼みますぞ」

が、返事がありません。不思議に思い、芳一の部屋の扉を開けてみました。が、部屋には誰もいないので、侍は上がりこんできました。

すると、部屋の中には二つの耳だけが浮かんでいます。侍はじろじろとそれを眺め、そして、ため息をついて、

「芳一どのがいない、仕方ない、迎えに行った証拠にこの耳だけ持って帰るか」

と、力を込めて、その耳を千切ろうとしたその時、芳一の中の真の力が、般若心経の不可思議な力と共に目覚めました。

「触るでない、下郎！」

と、幽霊侍の手をはたくと同時に、立ち上がりました。幽霊侍は驚くと同時に怒りました。

「うぬ、琵琶法師風情が何を抜かす」

芳一に掴みかかるうとしたその時、芳一は大喝し気合と共に手の平を侍に向けて広げました。

「南無魔里支天！迷わず成仏せい！」

輝く波動が幽霊侍を襲い、うはわああーと悲鳴を上げて、幽霊侍は霧のように消えてしまいました。

「因果な事よ。死してなお自分らの悲運に涙するとは」

そうつぶやいた後、芳一はかの墓地の方角へ向かって、朝の来るまでお経を唱え、平家一門の成仏を祈るのです。（終わり）

第六話 笠地藏

1

昔むかし、ある所に、貧しさのどん底にいるお爺さんとお婆さんがいました。どれくらい貧乏かと言うと、今日は大晦日だと言うのに、ろくすっぽ年を迎えるおせち料理の準備も出来ない体たらくで、これは困ったということで、二人は一生懸命笠を作り、これを市場でお餅と交換してもらおう、と言う事にしました。

「それじゃあ言うてくるよ、婆さんや」

と言うて、出来た五つの笠を手を持ち、ボ口屋を出発しました。すると、いつのまにか雪が降り出してきました。しんしんと、しかし結構な勢いで降り積もり、お爺さんは持っていた手ぬぐいを頭に乘せて、市場に向かうのでした。

年の瀬の市場は大変多くの人で繁盛していましたが、素人の二人の編んだ笠は余り造りが良くなく、日が落ちるまで待ちましたが、結局一つも売れず、お爺さんは仕方なしに家に帰ることにしました。雪はどんどん降り積もり、視界も利かないぐらいで、お爺さんは家路を急ぎました。

「ったく、笠は売れないし、雪は降るし、切れそうになるのう。あーウザイ」

などとブツブツ言いながら、街外れの山道まで歩くと、そこに六体のお地藏様が頭に雪を積もらせていました。お爺さんは、売れずに持ってきた笠をかさばるだけで邪魔だ、と思っていたので、ちようどええわいと言わんばかりに、お地藏さんに被せていきました。すると、一個足りないのです、どうせびしょびしょで冷たいだけじゃ、と持っている手ぬぐいを六体目にかぶせて、さっさと家路についたのでした。

「お帰りなさい、売れましたか」

と、部屋を暖かくして待っていたお婆さんは、シヨボイ顔をして首を振るお爺さんを見て怒り、晩御飯の雑炊の具を全部一人で食べてやる、と悪態をつきながら、ところで肝心の売れなかった笠は？と聞くと、

「ああ、あれは邪魔になったから道の地蔵にかぶせてきた」

と答えると、今夜の食事を抜きにされたくなければ取って来い、ドンだけ苦労して編んだと思ってるんじゃない、と大喝され、しぶしぶ吹雪の中を出かけようとした時、扉を叩く音が聞こえました。

「こんばんはー。お邪魔しますよ」

と、返事も待たずに扉を開けて入ってきたのは、驚いた事にさっきのお地蔵さんたちではないですか。お爺さんとお婆さんがおののいていると、

「おつ、雑炊が出来ておる」

「寒かったからさつそく頂こう」

「これ、婆さん。酒は無いのか酒は」

などと勝手な事を言って、計六体、笠をその辺に置くと、思いおもいに囲炉裏を囲い、壁に釣ってある漬物など取ってパクパク食べはじめる。

「さ、酒はありませぬ。ご馳走は何もありませぬ」

とお婆さんが答えると、六人は何事だ、酒もなしに年が越せるか、ああ、と嘆息し、一人が突如腰の袋からジャラジャラとさい銭を取り出し、

「福神来神、変化銭金」などと呪文を唱えると、瞬く間にそれは大判小判になりました。

「おい、六の蔵。これで酒、魚、餅、野菜などを買って来い」

とそれを手渡します。他の地蔵は浅ましく先を争って雑炊を取り

合つて啜すすっています。

「また僕ですか。いつも使い走りは僕だ。あーあ」
と言いながら、頭に手ぬぐいを乗せ、外へ出て行きました。

3

お爺さんとお婆さんが狭い家の隅で何も出来ずにいると、比較的小六の蔵と呼ばれた地蔵が帰ってきました。

「いやーはは、僕が買い物に行ったらみんなが好奇の目で見るのなんのって」

そりゃ見るわ、と二人は同時に内心ツツコミを入れました。と同時に、山ほどもって帰ってこられたものを見ると、おいしそうな魚や肉の山で、思わずよだれをたらしめました。戸口には樽が幾つか置いてあります。さつそく他の地蔵らが表を割って、酒をガブガブ飲みはじめました。お婆さんは料理に追われ、お爺さんは運ぶのに追われ、宴会を楽しんでいるのは地蔵どもばかり。浪曲などぶち始め、一人はどこからか三味線を取り出し弾きはじめ、一人は袈裟衣のよきな衣装を脱いで裸踊りをし、金太郎参る！などと言って横の地蔵相手に相撲を取りはじめ、まさに乱暴狼藉の限りがはじまりました。でも、料理も酒もお爺さんお婆さんにも振舞われ、旨いうまいと舌鼓を打っていると、一人の地蔵が出て行き、程なくして隣近所の評判の美女を二人ほど無理やり連れてきて、勺をさせはじめました。何がなんだかわからないが、逆らうと後が恐ろしそうなので、二人の麗しい女の人は、頬を染めている地蔵の盃に樽の酒を注いでやるのでした。一人の地蔵の浪曲が家に響き渡ります。

年は越せこせ、大いに越せ

どうせ越すなら 楽しく越せ

行く年来る年 ござんなれ

我ら歌わん 年の瀬の雪を

その合間に、はい、はいだのとまこと賑やかな合いの手が入り、年寄りのお爺さんお婆さんは、酒に酔い、気持ちよくなっていつしか眠りに就いたのでした。

4

あくる朝になったら、いよいよ新しい年です。鶏の鳴き声で目を覚ましたお爺さんは、あつと驚きました。部屋中にご馳走の残りが散らばり、酒樽は全部空になっており、昨日の出来事が夢でも何でも無かった事がわかったのです。さらに驚いた事に、そこかしこに小判やら金塊やらと言った宝物が散らばっているではありませんか。

「笠地蔵さまからのご褒美だったんじやのう……」

雪のやんだ朝方の初日の出は大層美しく、お爺さんとお婆さんは二日酔いで痛む頭を抑えながら、笠地蔵のいる方角に向かって手を合わせて感謝したのでした。（終わり）

第七話 雪女

1

昔々の事、武蔵の国（東国、現在の神奈川付近）のとある村に、茂作と言う年寄りの樵きこりと、巳之吉と言う若い弟子の樵が住んでいました。ある日の事、外は雪が降り積もっていましたが、頭の弱い茂作が寒さに耐えられん、焚き木を取りにいくぞ、と言うので、巳之吉は住み込み見習いの立場上嫌とは言えず、二人は横殴りの吹雪の中、山へと向かいました。

案の定猛吹雪になり、視界も利かぬほど降る雪に顔を打たれ、空は何処までも暗く、分かりやすく言う二人は遭難したのでした。

「いかん、このままじゃ凍死するわい」

「いつもの小屋に避難しましょう」

「わかつとるわいアホ。今探してるんじゃ」

アホはどっちだ、と巳之吉が寒さに凍えながら一人文句を言いながら歩いていけると、ようやくそのあばら家が見えてきました。

中へ入り、ともかく手に入れたほんのわずかな木の枝を囲炉裏にくべて暖を取り、吹雪が止むまでは、とそこで休憩する事にしました。やがて、夜も更けて、巳之吉が消えかけの囲炉裏の炎を見ながら、マツチ売りの少女のごとく、ああ、鯛のおかしら付きが見える、白いおにぎりが見える、などと幻覚の世界にまどろんでいると、突然木戸が開き、誰かが入ってきました。夢見心地で眺めていると、それは真っ白な着物に身を包んだ長い髪の女性でした。茂作のほうへ行き、足元に立って、口から何かを吹き出し始めました。それは凍てつくような冷たい息で、見るみる茂吉の体が真っ白に凍っていくではありませんか。巳之吉が、これも夢か、と思って生きた心地もなくいると、今度はその女は巳之吉のほうへゆっくりとやってき

ました。が、その顔を見下ろし、しばし考え込んだ後、そつと体を寄せて、こう言いました。

「お前もあの老人のように、魂を奪わねばいけないのだけれども、お前の美しさと若さは殺すには惜しい」

こう言つと、少しだけ間を置いて言いました。巳之吉は横たわつたまま身動きも出来ません。

「だから、助けてあげる。でも、今日あつた事は絶対に誰にも言うてはいけないからね。言つたらお前は死んでしまうよ」

と言つと、巳之吉の口に乾燥した草のような物を含ませました。そして、すうつと体をそむけ、開いたままの木戸から出て行つたのでした。巳之吉はそのまま意識を失つてしまい、翌朝になつてみると、茂吉は冷たくなつて死んでしまつていたのです。

2

樵の師匠を謎の事故で失つた巳之吉は、その後は舟渡しの仕事などとしておりました。ある日、乗つてきた乗客に、大変色の白い奥ゆかしい女性がおりました。薄黄色の木綿着をまとつたその姿は、どことなくやんごとなき風貌でした。その日の川は流れが激しく、しばし揺れました。ある急流にさしかかると、あわや、その女性が落ちそうになり、巳之吉はとつさに体を抱きしめ守りました。若い二人はあるがまま、という事で、二人は急激に恋に落ち、やがて一緒に暮らすようになりました。その女性の名前はお雪といい、天涯孤独で身寄りもないとのことで、美しい風貌に加え、哀れな身の上という事で、巳之吉は深くお雪を愛し、言葉だけでなく行動でもそれを実践し、やがて二人の間には三人の子供が生まれました。

幸せな日々が続いたある冬の夜、外では激しい雪が舞い散らしており、家にも風が吹きつけ、ガタゴトと扉が鳴るのです。

「そう言えば思い出すなあ、あの日の事を」

針仕事をしていたお雪は、小首をかしげ、何をですか？と聞きました。巳之吉は藁沓わらくつを編みながら話し続けます。

「いや、二年ぐらい前のことだったんだが、雪山で遭難したことがあってな、小屋に避難していたんだが、夜中に雪女が入ってきてなあ、一緒にいた樵のお師匠さんに口から吹雪をかけてな、お師匠さんは死んでしまったんじゃない」

針の手を止め、お雪はじつと巳之吉の顔を見つめている。

「それで、次は俺のところにきたんじゃない。ああ、俺も殺されるのかな、と思つたら、その雪女が情け深くてな、俺は若いから助けてやるつて言つたんじゃない。夢だったんだろうけど、大層美しい女だった。そう言えば、どこかで見たような……」

そこまで話して、巳之吉は愕然とした。二つの事実が脳裏を激しくよぎった。あの時の雪女の顔と、目の前のお雪は瓜二つじゃないか、と言う事と、あの時の雪女の最後の言葉。それは、あの日の事を誰にも言つてはならない、と言う事……

「言つてはいけない、と戒めたではありませんか」

お雪は突如泣き崩れた。泣きながら事情を話しはじめた。

「私はあの日、あなたに惚れました。だから、命を助けたのです。私たちは、雪山に迷い、助からない人間を冥土に送つてあげるのが仕事なのです。でも、私は役割に背き、あなたに体力を回復する食べ物を与えました。それゆえ、私は罰として人間に墜ち、そして愛するあなたの元へ嫁いだのです。ううう……」

突然の告白に、巳之吉は言葉もありません。そうだったのか……。巳之吉が思わず彼女の涙をぬぐおうとすると、お雪はきつい目で言います。

「これから、私たちは裁きの試練を受けねばなりません」
裁き？何の事だ？と巳之吉が思ったとたん、世界が真っ黒になり、体が歪み、意識が失われました。

気づけば、辺りは風も凍る大雪山。曇天の空に、生命の全く感じられない静けさ。横には、まなじりを決したお雪がいます。

「来ました。私たちは、奴に打ち勝たねば黄泉の世界に放り込まれるのです」

黄泉の国？何で？何が？と巳之吉が事態を飲み込めないでいると、重い足音が響いてきます。やがて、二人の目の前に青白く体の燃えた怪物が現れました。

「アイスブリザードよ。HPは200。見て分かると思っけど冷気の攻撃をしてくるから！」

言うなり、お雪はなにやら呪文を唱えはじめた。巳之吉がただおろろしていると、青い炎のような化け物の口が開き、そこからすごい勢いで冷たい吹雪が噴出してきました。二人に激しく吹きつけ、みのきちに39のダメージ！おゆきにはきかなかった！おゆきはフバー八をとねた！ふたりをやさしいひかりのころもがつつみこんだ！

「巳之吉！腰の薬草を使って！」

巳之吉は言われるがままに凍傷で痛む手でいつの間にか付いている腰の袋を開け、薬草を食べました。みのきはやくそうをつかった。みのきちのHPが31かいふくした！アイスブリザードはわらっている！

「チャンス！」

おゆきはスクルトをとねた！みのきちのしゅびりよくが14あがった！おゆきのしゅびりよくが12あがった！

「さあ、攻撃して！」

と言われて、巳之吉はやけくそでアイスブリザードに体当たりした。アイスブリザードに3のダメージ！アイスブリザードはヒヤダルコをとねた！みのきちに38のダメージ！おゆきにはきかなかった！おゆきはバイキルトをとねた！みのきちのこうげきりよくが2ばいになった！アイスブリザードのこうげき！おゆきに36の

ダメージ！

「巳之吉、薬草を使って。私は回復魔法は使えないの」

「あ、ああ、これが」

みのきちはやくそうをつかった。みのきちのHPが28かいふくした！

「バカ！アンタにじゃないよ、あなたはまだ余裕あるでしょ！私のHPは70しかないの！」

と言うと、お雪は巳之吉の腰の袋を奪い取りました。

「私は回復と補助呪文に専念するから、あなたはひたすら体当たりしてちょうだい」

そう言うなり足で巳之吉の背中を蹴った。巳之吉はその勢いでアイスブリザードにぶつかった。かいしんのいちげき！アイスブリザードに43のダメージ！おゆきはやくそうをつかった。おゆきのHPが33かいふくした！アイスブリザードはつめたくかがやくいきをはいた！みのきちに78のためーじ！おゆきにはきかなかった！巳之吉の残りHPは4になっています。瀕死の状態です。お雪は急いで薬草を使いました。みのきちのHPが31かいふくした！

「薬草じゃ追いつかない。ジリ貧だわ。とりあえず巳之吉は防御してて！」

みのきちはみをまもっている！アイスブリザードはザラキをとなえた！しかしみのきちにはきかなかった！しかしおゆきにはきかなかった！おゆきはやくそうをつかった！みのきちのHPが29かいふくした！

「渾身の力を込めて体当たりしてきて！勝たないと殺されるのよ！」

その言葉で、鬼気迫る現状をようやく掴んだ巳之吉は、愛するお雪を守るため、突如覚醒しました！タララッターラッター、みのきちはレベルがあがった！ちからが43あがった！すばやさ36あがった！かしこさが14あがった！うんのよさが22あがった！さいだいHPが28あがった！せいけんづきをおぼえた！とびひざげりをおぼえた！たいあたりをおぼえた！

アイスブリザードはようすをみている。おゆきはバイキルトをと
なえた！みのきちのこうげきりよくが2ばいになった！

「食らいやがれえええ！怒りのゴ布林パンチ！」

それゲームが違う、とお雪は内心突っ込みを入れました。みのき
ちはせいけんづきをはなった！アイスブリザードに178のダメー
ジ！アイスブリザードをたおした！経験値2500をてにいった！
1500ゴールドをてにいった！

「勝った！勝てたわ！」

とお雪と巳之吉が抱き合って喜んでいると、そこへ空から厳かな
服に身を包んだ女性が光と共に舞い降りてきました。

「雪の女王様！」

「お雪や、よくぞ魔物を倒したね。人間との愛、その力見せてもら
ったよ。さあ、あちらの世界へお帰り」

言うなり、雪の女王は手をかざし、すつと降ろした。二人は抱き
合ったまま、少しずつ薄らいで消えていきました。

二人は無事にもとの世界に帰ってきました。どちらともなく微笑
み、抱き合って床を転がりまわるのでした。こうして、死の試練を
乗り越えた二人は、いつまでもいつまでも仲睦まじく暮らしたので
した。（終わり）

第八話 虫愛する姫君

はるか昔、平安時代のころ、京の都のきらびやかな街の一角に、
按察使の大納言あひしと言う大変身分の高いお方が住んでおりました。一人の娘がおり、両親は大変かわいがっておりまして。ですが、この娘のいう事は変わっておりまして、

「世の人は蝶々や花と言った外見の美しいものに惹かれるけれども、私はそうじゃないと思う。人間は誠実に、物事の本質を追求してこそ意味があるってものよ」

などと、齡十四歳にしてこんな事を考えているのです。そして、部屋中に虫かごを置き、毛虫やら色んな虫たちを飼い、

「成長していく様子を観察するの」

と一日中眺め、

「特に毛虫は何を考えているのかわからないところが趣き深くていいわ」

などとのたまい、髪のを後ろでくくって、およそお姫様らしくない質素な着物に身を包み、化粧もお齒黒もせず、手のひらの上で毛虫を遊ばせたりするので、侍女たちはおののいて近づくのを嫌がるのでした。

侍女どもに虫を捕まえて来い、と命じても誰も行かないので、お姫様は村へ出て、近所の子ども達を集めます。

「これ、バツタ太郎、お前はバツタを集めておいで」

「バツタ太郎……ひどいよ、お姫様」

「うふふ。まあいいじゃない。これ、トンボ麻呂。そなたはトンボを採ってきて」

「はあい」

「そして、お前はクワガタ上皇よ。頼んだわよ、あと毛虫もね」

そう言いながら、子供たちにおこづかいを渡すと、子どもたちは現金なもので、あっという間に散っていきます。このように過ごし

ているものですから、いつしかあだ名は「虫愛ずる姫君」になってしまったのでした。

「これ、姫や、もう少し今風の娘のたしなみをしてはどうだね」

と、ある時、食事を取りながら父の按察使は言いました。すると、虫愛ずる姫君は、

「でもお父様、所詮そんなものは移ろい行くもので、私はそんな事より万物の真理を知りたいのです。毛虫はどうして蝶々になるのでしょうか？」

父が答えられずに黙っていると、さらに姫君は凄しい勢いでまくし立てるので、父も何も言えなくなるのでした。

可哀想なのは侍女たちで、姫君の部屋の掃除をしていると、天井から蜘蛛がスーッと降りてきて悲鳴を上げたり、籠から逃げ出した蛾などが部屋中飛び交うので逃げ惑ったり、しかし、姫君本人は涼しい顔をしているのでした。

やがて、この虫愛ずる姫君の噂は都じゅうに広まり、さてその奇人変人はどんな風貌なのだろう、と多くの男が見物にやってきました。ところが、すだれの奥から垣間見える姫君は、質素ながらたいへん美しい風貌をしており、見た者はみな「惜しい。きちんとお洒落にしていれば」などと思いつつも、手に毛虫を乗せて喜んでいる姫様はなあ、と思つて去つていくのでした。

その頃、都には不穏な噂が立つておりました。なんでも、旅人が最近行方不明になることが増えてきたらしいのです。

「本当だつて。岩みたいな大きさのアリが七兵衛をくわえてもつていつちまつたんだ！」

とある京の茶屋の中でまくしたてている男がおりました。周りの人々も耳を傾けています。

「どこでなんだ？」

「澤山街道の途中の大庭山の近くだよ。夜中に二人で道を急いでたんだ、そしたら山のほうから真っ黒な馬鹿でかいアリンコが来て、ああ、思い出しただけでも恐ろしい」

そこまで言うとその旅人は体を震わせて、二度と大庭山には近づきたくない、と震えるのでした。

その後も、何人もの旅人や行商が大庭山には巨大なアリが出る、危うく食べられかけた、と口をそろえるので、時の朝廷も放っておけず、討伐隊を結成し、巨大アリを退治をする事にしました。

「本当なの？その話は」

侍女の立ち話を耳にした虫愛ずる姫君は聞きました。

「はい、屈強なもののふを集めて、今日にも退治に出かけるそうです」

姫君も少し前から巨大アリの噂話は聞いておりました。何かよくない予感がして、ふと思い立って家を出るのでした。

その日、およそ百人もの巨大アリ討伐隊は、大将の横乃上時麻呂を中心に、京の都から大庭山へと到着しました。山は鬱蒼とした木々に茂っており、何が出てもおかしくない雰囲気です。

「たいまつを常にかかげろ。もののけは火に弱いはずだ。火矢の用意もしておけ」

そう言いながら、慎重に山道に分け入りました。旅人達の証言では、街道を歩いているとすぐに出てきたらしいが、と時麻呂は思い出しながら、ゆっくりと歩を進めます。

「時麻呂様。あそこに大きな洞窟があります」

指さされたほうを見ると、確かに山道をもう少し上がった場所に黒々とした穴が開いています。豪胆で知られる時麻呂も思わず唾を飲みました。

「よ、よし、入ってみるか」

「う、うわっ」

一人の武士が悲鳴を上げました。洞窟の入り口にはなんと、生々しいちぎれた人間の手があるではないですか。一同は思わず足がすくみました。

その時、洞窟のほうで何かが揺らめきました。なんと、人間の五倍はありそうな大きさのアリがゆっくりと出てくるではありませんか。

「火矢を射よ！者ども伏せろ！」

巨大アリを見るなり時麻呂は伏せながら叫びました。後ろにいた弓隊が一斉に矢を放ちました。何本かがアリの黒々とした体軀に刺さりました。

「グギューッ」

巨大アリはこの世のものとも思えぬ咆哮を上げて洞窟のほうに逃げました。一瞬の静けさが訪れます。

「油断するな！また出てくるかも知れぬ」

言いながら慎重に時麻呂は脇差を抜き、少しずつ洞窟の中へと進みました。瞬間、飛び出してきた巨大アリに噛みつかれ、空中で振り回されました。一匹ではなく、次々に数匹出てきたので、討伐隊は大混乱に陥りました。武勇が取りえの武士達は、突如現れた巨大アリの群れと必死に戦いましたが、やがてまず火矢が尽き、何匹かを倒したものの、後から後から出てくる恐ろしいほどの数の巨大アリたちに、次々と食われてしまいました。すでに大庭山を埋め尽くすほどの巨大アリが、何かに怒り狂ったように行進を開始しはじめました。何百匹の巨大アリは、一路京の都を目指しているようです。

その様子を討伐隊の見物ついでに木陰でこっそり見ていたバツタ太郎たちは仰天して、全速力で都へ戻りました。

京の都の外れの道を、一人歩いていたのは虫愛ずる姫君でした。何かに導かれるように歩を進めています。そこへ、必死の形相でバツタ太郎たちが走ってきました。

「姫様！大変だよ！巨大アリどもが都を襲いにくるよ、逃げよう！」
と言うなり、有無を言わせず姫様の手を引っ張ります。彼方遠くには確かに真つ黒な何かがこちらへやってくるのが見えます。引きずられるまま姫君は何かを考えていましたが、やがて、きっぱりと言いました。

「私が彼らを止めます。あなた達は検非違使のお館に知らせに行きなさい」

そう言うと、姫君はそこに立ち止まりました。クワガタ上皇は涙目で危ないよ、食べられちゃうよ、と言いましたが、聞く耳を持ちません。

「いいから早く行きなさい！」

その声には不思議な威厳があり、バツタ太郎たちはまた一目散に駆け出しました。

やがて、虫愛ずる姫君の前に、数百匹の巨大アリがやってきました。先頭の一匹が、姫君の前で立ち止まりました。

——お前は俺達の言葉が分かるのか

——わかります。私はあなた達のこと大好きなの

——人間どもは俺達の巣を襲った。報復せねばならない

——お願いですからそのような真似はやめてください。それにあなた達が先に人間を襲ったのでは？

——人間が無闇に山に入り我が物顔で縄張りを荒らすからだ

——もう二度とあなた方の住処を荒らしません。どうか許してください

後ろのほうの仲間が構わず殺してしまえ、と言っている。都のほうからも、人の群れがやってきます。おそらく検非違使が急遽軍を編成し戦いにやってくるのでしょう。いけない、と虫愛ずる姫君は焦りました。このままじゃどちらかが全滅するまで殺し合いになっ
てしまう。

——では、私の命で許してください。そう約束してくれたなら、ま
ず人間のほうを説得して帰らせませう。その後私を殺してください。

そう言った姫君の目には嘘はなかった。先頭を来ていた巨大アリ
は実は群れの王でした。王は、くるりと踵を返しました。そして一
言だけ言いました。

——二度と俺達の縄張りを荒らすな

そして、数百匹の巨大アリはみな大庭山へと帰っていきました。立
ち尽くす姫君の元へ、検非違使の一隊がやってきました。

「娘、大丈夫か？何故アリどもは引き返していったんだ？」

「縄張りを荒らすな、とだけ言っていました」

そう答えた姫君に、バツタ太郎たちが飛びついて抱きつきました。

「心配したよお姫様！」

「無事でよかったよ！食べられちゃうかと思った！」

姫君は初めて笑顔になりました。こうして、虫愛ずる姫君の不思
議な力で、京の都は守られたのでした。（終わり）

あとがき

さて、書きたい放題書いてきたこのシリーズも、もう書きたい作品が無くなったのでこれで終わりにしたいと思います。一応お断りと言つか、あとがきも書いておこうと思います。ネタ晴らしと言つか、解説が必要な作品もありますのでw

「桃太郎」に関しては、特段書くことはありません。ニヒルな歌舞伎ものの風にアレンジしてみました。

「鶴の恩返し」も、王道のパターンを踏襲しています。それにしても不思議なのは、他にも一寸法師ですとか、桃太郎もかぐや姫も登場する老人（夫婦）には皆子どもがいないのですね。何か理由があるのでしょうか。単に独立して別居しているだけならいいのですが。

「かぐや姫」は、月に帰る、と言うエンディングを元にありますが、ラノベ風味にしてみました。この展開なら続きも書けますが、それは既にかぐや姫ではないので割愛しましたw

「猿蟹合戦」は個人的にお気に入りです。作者の年齢がバレバレなのは内緒の話です。

「耳なし芳一」は、子どもの頃に初めて読んだ時、耳を千切られるのがとても可哀相に思ったので改善？してみました。元ネタはラファディオ・ハーンの「怪談」です。ハーンは他にもろくろ首とか面白い話を書いているイギリス人です。

「笠地蔵」はとりあえずハッピーエンドのままですが、中身を面

白くしてみました。個人的には一番これが面白いかな、と思っています。

「雪女」もなんとかハッピーエンドにしたくて、ドラゴンクエスト風に二人には頑張ってもらいました。ファミコン世代（また年がばれる）には面白いのではないでしょうか。

最後の「虫愛ずる姫」君は「堤中納言物語」と言う平安末期に書かれた物語集に書かれているもので、あの「風の谷のナウシカ」の元ネタになっているものです。と言う事で、姫君にナウシカよろしく巨大昆虫と無理やり対峙してもらいました。どんなもんだったでしょうかw

軽い気持ちで楽しんで読んでいただけたら、と思います。それはこれであとがきを終わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3306h/>

本当はもっと面白く恐ろしいニッポン昔話

2011年1月24日12時58分発行